様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２１８４

研究課題名（和文）フェリックス・ガタリの「スキゾ分析」の理論、およびその臨床実践に関する研究

研究課題名（英文）The study of Schizoanalysis of Felix Guattari : theory and clinical practice

研究代表者
山森　裕毅（Yuki, Yamamori）

大阪大学・ＣＯデザインセンター・特任講師（常勤）

研究者番号：００６４８４５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：■フランスの精神分析家フェリックス・ガタリの提唱したスキゾ分析の研究を行った。また、それに関連する精神療法および哲学の対話実践についても研究を行った。
■ガタリにかんしては口頭発表3回、論文2本を提出した。著書を刊行に向けて準備している（現在16万字程度）。対話実践にかんしては口頭発表2回、論文2本、実践を複数回行った。その他、メディア出演などがある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
フェリックス・ガタリの提唱するスキゾ分析は精神分析を批判する形で構想されたものであるが、その理論や実践可能性はこれまで深く探究されてこなかった。本研究ではそこに踏み込んだものである点で学術的な意義がある。
また精神療法や当事者研究など精神疾患の治療や回復につながる実践と関連させて考察することで、対話の重要性が高まっている現代日本社会のなかにスキゾ分析の視点を導入することができるという社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：My research is on schizoanalysis proposed by the French psychoanalyst Felix Guattari. In relation to it, I also studied the dialogic practices of psychotherapy and philosophy. I have given three oral presentations and submitted two papers on Guattari. I'm writing a book for publication. Regarding dialogue practices, I have given two oral presentations, two papers, and conducted workshops several times. In addition, I have appeared in some media.

研究分野：哲学

キーワード：フェリックス・ガタリ　スキゾ分析　制度分析　制度精神療法　記号論　対話実践　精神分析　当事者研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

精神分析家であり社会活動家であるフェリックス・ガタリは、哲学者のジル・ドゥルーズとともに『アンチ・オイディプス』（1972 年）や『千のプラトー』（1980 年）を公刊し、世界的に読者を得ることになったが、その功績のほとんどはドゥルーズに帰されることになり、ガタリは難解奇抜な従者のごとく扱われ、その活躍を顧みられないままにされていた。

日本では少数の研究者らが継続的に研究を続けていたが、ガタリの左翼思想家的な側面や精神医療に対する臨床家および運動家的な側面など、実践的な部分に光を当てるものが多く、理論的な側面についての研究は非常に乏しかった。何より、彼の発案した「スキゾ分析」にかんするまとまった研究（概念の整理、理論の構造、批判対象との関係、経年による変遷、実践的意義など）はされておらず、手つかずの状態であった。海外においても同様の状態だった。

一方で、ステファヌ・ナドーによるガタリの草稿の掘り起こし、新編集によるテキストの再版などが行われたり、アンヌ・ソヴァニャルグやマウリツィオ・ラッツァラート、ゲリー・ジェノスコ、ビフォらによるガタリ再考の契機が盛り上がりつつあった。

２．研究の目的

本研究の目的は、フェリックス・ガタリの「スキゾ分析」について、その理論と実践可能性を研究することにある。スキゾ分析は精神分析と異なり、教育課程が存在しないため、実践的な継承が行われていないと思われる。そのためスキゾ分析の実践面をガタリのテキストを辿りながら再構築していく研究となる。こうして理論と実践可能性を探りながら、その方法が現在の社会において（例えばガタリの従事した精神医療・精神福祉の領域において、あるいはそれより広い政治的・社会的な領域において）実践的な意義があるのかどうかについても考察をしたいと考えた。

３．研究の方法

ガタリの著作群の中から 1979 年までのものに焦点を絞り、そのなかでスキゾ分析の発案と練り上げを追うという形で研究を進めた。また、スキゾ分析が精神療法系の臨床実践と関連性が深いため、研究者自身もできるかぎり実践の場に参加し、実践感覚を養いつつ、それを通して理論を捉えられるよう努力した。

【扱った著作】

『精神分析と横断性』　*Psychanalyse et transversalité*
『アンチ・オイディプス草稿』　*Écrirts pour l'anti-œdipe*
『アンチ・オイディプス』　*L'anti-œdipe*
『分子革命』　*La révolution moléculaire*
『機械状無意識』　*L'inconscient machinique*
『人はなぜ記号に従属するのか』　*Lignes de fuite*
（途中、別の企画との関連で『千のプラトー』*Mille plateaux* も扱った。）

【方法①】

著作群のなかからスキゾ分析の理論およびその実践にかんする記述を精読し、その内実を明確にするよう考察と整理を行った。大まかには以下の問いを意識しながら精読を進めた。

・スキゾ分析は、誰を／何をターゲットにしているのか？
・スキゾ分析は、どのような前提や理論、世界観を備えているのか？
・スキゾ分析は、どのような効果をもたらすのか？
・スキゾ分析は、いつ／どこで／誰が／どのように行うのか？
・スキゾ分析は、精神分析やその他の実践と何が同じで、何が違うのか？

【方法②】

ガタリが直接に批判あるいは参照した理論および実践にかんする著作を精読し、比較を行った。おおよそ以下の形で分類できる。

・精神分析（とりわけジャック・ラカン）
・制度精神療法（とりわけジャン・ウリ）
・反精神医学（とりわけ R･D･レイン）
・呪術（とりわけヴィクター・ターナーとエドマンド・リーチ）

・記号論（とりわけ C・S・パース）

【方法③】
ガタリ自身とは直接関係ないが、ガタリが働いていたラボルド精神病院での実践に近しいと考えられる現代的な実践（主に対話にかんする実践）について、その著作を調べたり、その実践を直接学び、研究者自身が実際に行ってみた。そうしたことを通して、ガタリが生前に身を置いていて状況を疑似的に体感しようとした。主に以下の領域である。
・当事者研究：とりわけ精神疾患を持つ人たちとの対話実践で、継続的に会を開いた
・オープンダイアローグ：同上だが、これはほとんど文献研究のみ
・AA に代表される自助ミーティング：文献研究および疑似的なミーティングへの参加
・哲学対話：哲学の思考法を複数人で行う対話実践で、継続的に会を開いた

４．研究成果

ガタリのスキゾ分析にかんして、年代を追って研究を進めることができた（著書の執筆のため既出の論稿の加筆修正も行った）。それによってガタリの思考の変遷を辿ることができ、スキゾ分析の構造をある程度明らかにすることができた。また、人類学者が調査した未開人の医療実践である「呪術」が、スキゾ分析のモデルとして参照されていることに気づくことができたのは大きな前進だった。全体を通して、スキゾ分析について理論的も実践的も緻密な研究ができたと考える。現在、研究成果をまとめたものとして著作を準備中である（現時点で 16 万字程度）。

<u>ガタリ関連の成果物</u>
【論稿】
‣「ンデンブ族の医師によるスキゾ分析」、『I.R.S―ジャック・ラカン研究―』、17 巻、2－19 頁、2018 年
‣「artifice の哲学と〈雀蜂-蘭〉の機械状生態学――フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス草稿』より」、『hyphen』、3 号、5-10 頁、2018 年
‣「スキゾ分析の初期設定」、『ドゥルーズの 21 世紀』、河出書房新社、2019 年
‣「神話の精神分析、呪術のスキゾ分析」、勁草書房、2022 年発行予定

【口頭発表】
‣「リトルネロについて私が知っている二、三の事柄」、ガタリ国際ワークショップ、大阪大学、2019 年
‣「スキゾ分析と反精神医学」、DG-Lab、2021 年

<u>ガタリに直接関連しない成果物</u>
【論稿】
‣「第 9 章　ミーティング文化の導入」、『メンタルヘルスの理解のために』、ミネルヴァ書房、2020 年
‣「9：哲学対話とオープンダイアローグ」、『オープンダイアローグ　思想と哲学』、東京大学出版会、2022 年
‣「当事者どうしの対話活動を学ぶ：横断術「社会と臨床」授業報告」（ほんまなほ・高橋綾との共著）、Co＊Design、8 号、99－110 頁、2020 年

【口頭発表】
‣ワークショップ「いろんな精神的・身体的コンディションにある人たちが語りあう場とは？」（ほんまなほ・高橋綾との共同発表）、日本哲学プラクティス学会、2021 年
‣「日本のメンタルヘルスと対話」（ほんまなほ・高橋綾との共同発表）、大阪大学と江原大学（韓国）との合同会議、2021 年

本研究を通して得た知見は社会貢献活動としてささやかながら市民への還元も行っている。
【ワークショップ】
‣「子どもといっしょにてつがくセッション」、『Arts Initiative Tokyo ディアミーフェス！越境するアートとフクシから考える、子どもと私の豊かな学びの場』、2018 年 9 月 22 日
‣「てつがくカフェ「語りにくさを、ひらく」」、Arts Initiative Tokyo MAKING ART DIFFERENT：フクシとアートのラボ、2019 年 6 月 22 日
‣ワークショップ「てつがくカフェ「これでいいのだ」」、Arts Initiative Tokyo MAKING ART DIFFERENT：フクシとアートのラボ、2019 年 8 月 3 日
‣「現代アートの対話型鑑賞+てつがくカフェ」、Arts Initiative Tokyo dear Me プロジェクト「塩田

千春展：魂がふるえる」鑑賞プログラム、2019 年 8 月 29 日

- 「こどももおとなも哲学セッション！ 作品をみて、感じて、いろいろな「ふしぎ」を考えよう！」、第 12 回恵比寿映像祭「時間を想像する」：YEBIZO MEETS トーク＆ワークショップ、東京写真美術館、2020 年 2 月 11 日
- 「「"Happyplaces"をめぐる 784 人との対話」をめぐる哲学対話」、『"Happyplaces"をめぐる 784 人との対話』、Shibaura House、2020 年 2 月 26 日
- 「「てつがく」でモヤモヤする日」、梟文庫、2020 年 9 月 12 日- 2020 年 10 月 3 日（全三回）
- 「哲学対話：子どもの権利について」、『哲学カフェ×子どもの権利 コロナ禍で大人が考えよう！子どもの権利』、梟文庫、2022 年 1 月 29 日

【ネットラジオ】

- パネリスト「コロナ禍における時間の在り方」、『ちくわがうらがえる presents のきした話「ソロソロ、コロナ – 時間銀行をケーススタディに“ コロナ禍と時間の在り方 ” を探る」』、NPO 法人リベルテ、2020 年 9 月 19 日
- パネリスト「Beyond Distance #6 自然を見つめることから表現は生まれる」、SHIBAURA HOUSE NL HOUSE : Beyond Distance Youtube、2021 年 8 月 20 日
- トークゲスト：ラクエストラジオ 5 回＆6 回、『ラクエストラジオ』、梟文庫、2022 年 1 月 15 日

その他、エッセイのような細かな業績にかんしては割愛する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 ほんまなほ，高橋綾，山森裕毅	４．巻 8
２．論文標題 当事者どうしの対話活動を学ぶ：横断術「社会と臨床」授業報告	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Co＊Design	６．最初と最後の頁 99‐110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 池田光穂，井上こう，海野隆，岡野彩子，上條美代子，北村敏泰，熊野以素，滝奈々子，林田雅至，宮本友介，山森裕毅	４．巻 8
２．論文標題 「世直し」ノオト（2019年度・冬）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Co＊Design	６．最初と最後の頁 19‐31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山森 裕毅	４．巻 6
２．論文標題 「マジョリティ・ブルー」（「世直し」ノオト（2018年度・冬）所収）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Co＊Design	６．最初と最後の頁 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山森裕毅	４．巻 24
２．論文標題 書評：藤高和輝『ジュディス・バトラー 生と哲学を賭けた闘い』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『フランス哲学・思想研究』	６．最初と最後の頁 300‐304
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山森裕毅	4．巻 7
2．論文標題 「これでいいのだ」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Co＊Design	6．最初と最後の頁 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山森裕毅	4．巻 17
2．論文標題 ンデンブ族の医師によるスキゾ分析	5．発行年 2019年
3．雑誌名 I.R.S―ジャック・ラカン研究―	6．最初と最後の頁 2‐19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山森裕毅	4．巻 3
2．論文標題 artificeの哲学と〈雀蜂-蘭〉の機械状生態学―フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス草稿』より	5．発行年 2018年
3．雑誌名 hyphen	6．最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山森裕毅	4．巻 4
2．論文標題 質問をデザインする	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Co＊Design	6．最初と最後の頁 31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山森裕毅
２．発表標題 「リトルネロについて私が知っている二、三の事柄」
３．学会等名 ガタリ国際ワークショップ～リトルネロをめぐって～
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 松本　卓也、武本　一美	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 300
３．書名 メンタルヘルスの理解のために	

１．著者名 ヤーコ・セイックラ ，トム・アーンキル，　斎藤 環（監訳）	４．発行年 2019年
２．出版社 医学書院	５．総ページ数 350
３．書名 開かれた対話と未来	

１．著者名 檜垣 立哉、小泉 義之、合田 正人ほか	４．発行年 2019年
２．出版社 河出書房新社	５．総ページ数 512
３．書名 ドゥルーズの２１世紀	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関